英霊にこたえる会たより

英霊にこたえる会
102-0073 東京都千代田区
九段北 3-1-1
靖國神社遊就館内
電話・FAX
03-3261-7415
郵便振替 00120-7-160184

「母と歩いた戦後70年……祈りと感謝」

語り部　兵庫県遺族会　吉識　隆子

英霊にこたえる会は、平成28年4月23日「ホテルグランドヒル・市ヶ谷」で第42回総会を開いた。恒例の記念講演に替えて、兵庫県遺族会の吉識隆子氏に「母と歩んだ戦後70年・・・・・祈りと感謝」と題する「語り」を歌・藤原千鶴氏、伴奏・玉置三貴氏との共演で披露していただいた。本資料は、その「語り」の内容を紙面上に再現したものである。（小見出しは事務局）

父　戦死の知らせと幼い兄の死

私は昭和十八年一月に生まれました。その二年後に出征した父は再び日本の土を踏むことはありませんでした。紙切れ一枚（赤紙）で召集され、二人の幼子を残して死んでいったのです。私は父の声を聞くことも、ぬくもりを感じることもなく育ちました。父の姿は色あせた写真でしか知りません。

父の戦死を知らされたのはビルマから届いた、たった一枚のハガキでした。「吉識武雄・昭和二十年七月二十六日、生死不明」、ただそれだけが書いてありました。生きて帰ってほしい、と一心に祈りつづけた母や家族の願いも届かず、それはあまりにも残酷で惨い知らせでした。途方にくれた母は打ちひしがれ、魂の抜け殻のようになりました。

夫の実家で頼りになる人はいない。力になってくれる人もいない。どこへも、誰にも訴えようのない淋しさ、辛さ、悲しさ・・・・・どこまでも過酷でした。けれども、母は生計を立てるため、自分自身を奮い立たせて、幼い私と兄を祖母に預け、村の小学校に勤めました。そしてその傍ら、慣れない稲作や田畑の仕事など昼夜を問わず働き続けたのです。

（かあさんの歌）

♪かあさんは　夜なべをして
手ぶくろ編んでくれた
木枯し吹いちゃ　つめたかろうて
ぜっぜと編んだだよ
故郷（ふるさと）のたよりはどどくゝ
いろりのにおいがした

そして、昭和二十年八月十五日終戦。しかし、父は帰ってきません。私たち家族にとって父が帰

新たな国立の戦歿者追悼施設は、
心ある多くの国民の声と力を
結集して、断固阻止しましょう。

って来てこそ終戦です。なぜ、もう少し早く戦争が終わらなかったのか、憤りだけが残ります。

父の戦死の四年後、風邪をこじらせた九歳の兄が肺炎で亡くなりました。兄は父亡き後、吉識家の長男として、また、跡取りとして大事に育てられ、家族の期待を一身に集めていました。それだけに、父の戦死に続き兄の死という二重の悲しみに家族、親戚一同が失意のどん底に陥りました。とりわけ、「二人の子どもを頼む」「立派に育ててくれ」と、度々戦地から手紙を送ってきた父の願いに応えられなかった母の無念さは推し量れません。

母の同僚の手助けを得て
吉識家を出る

その日から母は兄に対する思いを私に重ね、父親の厳しさと母親の優しさ、二人分の愛情を注いで私を育ててくれたのです。父と兄が亡くなったことにより吉識家は私ではなく、父の妹が継ぐことになりました。つまり母と私は要らない存在になったのです。

当時は母が学校に勤めて生計を立てていたにも関わらず、帰宅すると夕食の食べ物は何も残っていません。おひつにひっついていたご飯粒をかき集め、お湯をかけ膨らませて飢えをしのいだと、当時のことをよく涙ながらに話していました。相続のことも絡んで祖母や叔母は私たち親子に冷たく、ついに母は針のむしろのような家を出る決心をし、同僚の先生の実家の離れを借りました。父と兄の位牌を風呂敷に包み、布団と簡単な生活用品をりんご箱に詰め、近所の人の荷車に載せてもらって家出同然に夜中に引っ越したのです。小学校一年生の時でした。かすかな月の光を頼りにギギッ、ギギッ、という荷車の音を聞きながら、眠い目をこすって母について歩いた夜の道は子ども心に不安や寂しさでいっぱいでした。

(月の砂漠)

♪月の砂漠を　はるばると
旅のらくだが　ゆきました
金と銀との　鞍置いて
二つ並んで　ゆきました

先生の家に着いた時、同僚のお母さんが入れて下さったお茶の温かさに母が思わず涙したのを今でも覚えています。その日から八畳一間で母と二人きりの貧しい生活が始まりました。夜が更け、暗闇を通してゴトン、ゴトンと聞こえてくる播但線の汽車の音が、私たち親子のこれからの人生を暗示しているようで、とても不安で寝付かれない日もありました。内職を終えてやっと布団に入ってきた母の胸に飛び込んだこともありました。

しかし、どんなに貧しくても、どんなに寂しくても、母の温もりに包まれ、母に守られているという安心感で幸せでした。当時、私の唯一の楽しみはラジオを聞くことでした。ラジオから流れてくる、川田孝子・昌子姉妹が歌っていた歌も母とよく歌ったものです。

(みかんの花咲く丘)

♪みかんの花が　咲いている
思い出の道　丘の道
遥かに見える　青い海
お船が遠く　かすんでる

母は父の戦死の公報を受け取り、朝晩仏前で手を合わせていても、父はいつかきっと帰ってくる・・・・と、父の戦死をどうしても受け入れることが出来ませんでした。そして、父と兄の魂は母の心の中でズーと生き続けたのです。

(里の秋)

♪さよなら　さよなら　椰子の島
お船に　揺られて　帰られる
ああ　とうさんよ　ご無事でと
今夜も　かあさんと　祈ります

二つの夢を胸に
必死で働く母の姿

少し生活に余裕ができると、母は姫路へ映画を見に連れて行ってくれました。当時流行っていた三益愛子と松島とも子の「母物語」の映画です。そして、その帰りにはお溝筋にあった「東来春」というラーメン屋に連れて行ってくれました。順番を待って食べたアツアツのラーメンの味が今も忘れられません。四十円でした。当時の私たち親子の唯一の楽しみだったのです。

母には二つの夢がありました。一つは父の戦地からの手紙に応えるため、私を一人前に育てること、もう一つは自分の家を持つことです。そのため母は必死で働きました。当時の母の給料は少なく、親子二人が食べていくのがやっとでした。来る日も来る日も、近所のおばさんからいただいた唐辛子の葉を炊いておかずにしていました。小学校から帰って、唐辛子の葉をちぎるのが私の役目でした。そして、薄暗い裸電球の下で夜遅くまで背中を丸め、一心に針を持つ母の姿が今でも目に浮かびます。この子を一人前にしなければ……の一心で働き続けたのだと思います。

（かあさんの歌）

♪かあさんの　あかぎれ痛い
生味噌（なまみそ）をすりこむ
根雪もとけりゃ　もうすぐ春だぞ
畑が待ってるよ
小川のせせらぎが聞える
なつかしがしみわたる

母は内職で得たわずかな収入で私にいろいろな習い事をさせてくれました。そして、自分がそうであったように一人になっても食べていくため「手に職を持つ」大切さをいつも私に話していました。当時としては珍しくピアノ、バイオリン、お琴などを習わせたのもそのためです。月々の月謝が払えず、恥ずかしい思いをしたことも何度かありました。

しかし、母の苦労を身近に見ていた私は、一生懸命母の期待に応えるため頑張りました。そして私を高校、大学まで行かせてくれたのです。大学卒業後私も教職に就き、やがて優しい主人と結婚、二児の母親となってからも母に支えられ、お陰で三十八年間音楽教師として勤めることができました。今日、ここに教え子と共に皆さんの前に立てるのも母のお陰だと感謝の気持で一杯です。母がよく歌っていた歌です。

（ここに幸あり）

♪嵐も吹けば　雨も降る
女の道よ　なぜ険し
君をたよりに　わたしは生きる
ここに幸あり　青い空

父の命日には毎年
母と共に靖国神社に参拝

時代は流れ昭和五十年代に入ると、母は四十年近い教師生活にピリオドを打ち、やっと第二の人生を少しずつ楽しむようになりました。父の命と引き換えにいただいた遺族年金を少しずつ貯めた貯金と自分の退職金で家も建てることができたのです。そして小国良子さんという親友もできました。二人ともいまは他界していますが、同じ戦没者の妻として、また、夫の戦没地が同じビルマという共通の境遇で、唯一心を開いて語り合える友でした。

私たちは三人でよく旅行をしました。夜になると、二人はいつも戦後のイバラの道を振り返り、「アホらしい、ほんまにアホらしい」と、悔しがります。そして、最後にはいつも二人で「ほんまに、いろんなことがあったなあ！」とため息をつくのです。

私は、「いろんなことがあったなあ」という、その一言に込められた深い意味を理解し、戦争とは征く者、残される者、還る者、いずれにとって

も生き地獄の苦しみである、とあらためて思ったのです。

母と小国さんがデイサービスでよく歌っていた歌です。

（同期の櫻）

♪貴様と俺とは　同期の桜
同じ兵学校の　庭に咲く
咲いた花なら　散るのは覚悟
みごと散りましょ　国のため

私と母は毎年父の命日に靖国神社にお参りしました。玉砂利を踏みながら大きな鳥居をくぐると、母は「おとうさん、今年も来ましたよ」と小さな声でつぶやくのです。昇殿で背中を丸め合掌している母の小さくなった後ろ姿が戦後の苦難の日々を物語っているようでした。お参りを終えると「ああ、これで一年間元気がもらえた。また来ますね」と晴々とした顔で帰路につくのでした。

（靖国神社の歌）

♪忘れちゃならぬ　靖国の
宮で逢うぞの　合言葉
遺族の心　結ばせる
花の九段の　大鳥居
ああ鎮まるみ霊　靖国神社

九十六歳で天国の父のもとへ
母の生涯に感謝の気持一杯

昭和五十九年三月、母が三回目のビルマ戦跡巡拝に行く時、私も四十年間のつもる思いで初めて参加しました。母六十九歳、私四十一歳の時でした。三月のビルマは日中は猛暑ですが、朝夕肌寒い位に温度差があり、南国特有の真っ赤な夕日が印象的でした。父もこの夕日をながめながら、故郷を思い、母や家族に思いを馳せていたことでしょう。

（故郷）

♪兎（うさぎ）追いし　かの山
小鮒釣りし　かの川
夢は今も　めぐりて
忘れがたき　故郷（ふるさと）

無心に流れるビルマのイラワジ川やシッタン川、そして、咲き乱れる野辺の花にさえ、ここが疲れや飢えを凌いで父たちが戦った山河であるのかと思うと涙がこみ上げました。父が命を落としたビュー河をのぞみ、静かにいつまでも母と祈り続けたのです。

（海ゆかば）

♪海ゆかば　水漬くかばね
山行かば　草むすかばね
大君の　辺にこそ死なめ
かえりみはせじ

母はどんなに忙しくても疲れていても、朝夕父の仏前に座りました。父の仏前に座ることがたった一つの安らぎであったにちがいありません。その母も平成二十四年、九十六歳で父のもとへと旅立ちました。私は平和の礎となった父の死を誇りに思い、戦争という大きな渦の中で、けなげに生きて私を育ててくれた母に感謝の気持で一杯です。今頃、母は父と一緒に幸せに暮らしていることでしょう。これからも「千の風」に乗って私たちを見守って下さい。

（千の風になって）

♪私のお墓の前で　泣かないでください
そこに私はいません
眠ってなんかいません
千の風に　千の風になって
あの大きな空を　吹きわたっています

悲しい戦争が終わって七十年、国の経済発展の礎となりながらいまだ異国に眠るご遺骨のお帰りを心から願い、御霊のご冥福をお祈りいたします。